ドクター内田のジャズは古くて新しい ～5～

米軍クラブで生バンド聴く

最初のジャズ仲間となったレコード屋さんの店員は、僕より少しばかり若かったはずだけれど、ことジャズに関しては大変な先輩でものすごく詳しかった。おまけに英語がぺらぺらという妙な男で、なぜかあっという間に意気投合した。

それ以来レコードを買うわけでもないのに店に入りびたって、新譜やら兵隊たち持参のSPレコードを、聴かせてもらうことができた。

そんなある日、その店員が言う。「鶴舞公園の中に、下士官以下の兵隊用のクラブがあってジャズが聴けるんだ。日本人はオフリミットだけれど、知り合いがいるから、もぐりこまないか」。まだ生の音なんて聴いたこともない僕は、一も二もなく飛びついた。

当時、空襲をまぬがれた市内の主な建物はアメリカ軍に接収されており、そのクラブのあった名古屋市公会堂も、例外ではありえなかった。

夜陰にまぎれて？　地下のクラブに入り込むと、そこは正に別天地。お客の大半を占めた黒人兵たちは、とても人なつっこくて、僕らを大歓迎で迎えてくれたばかりか、そこで初めての体験に酔いしれることになる。

ステージでくりひろげられていたGIバンドの音楽こそ、レコードでしか聴く手だてのなかった、あのエキサイティングな〝ビ・バップ〟と〝スキャット・ボーカル〟（歌詞のない即興的な唱法）だったのだ。

その強烈な光景は、今も目と耳に焼きついて忘れようもない。

と同時に、「ジャズは生で聴くのが最高」という僕の信条が生まれる、最初の体験となったのだ。

ちっぽけなレコード店に勤めているわりには、その店員のまわりには種々雑多な友人がいて、紹介されるたびに「へえー。知り合いが多いんだなあ」と驚かされたが、エルモア中尉もそんな一人だった。

大学を出てすぐに兵役に引っ張られたといった感じの、ハンサムでスマートな上に、とても礼儀正しいすてきな印象だった。

「僕の部屋に遊びに来ませんか」。遠慮がちの誘いに僕らは喜んで応じたが、名古屋・新栄町の一角にあって、戦前のホテルを、そのまま将校専用の宿舎にしたというエルモア中尉の一室は、割合質素な中にも落ち着いた雰囲気があった。

「これ見たことありますか？」。言われて視線をのばすと、目に入ったのは、まだうわさでしか聞いたこともないLPレコードと、その専用プレーヤーだった。

それは今なら小学生でも欲しがらないかもしれないような、ちっぽけなポータブル型プレーヤーだったけれど、初めて見た僕らには、何とも不思議な機械に見えた。

何しろ手まわしでなく動く上に、十インチ片面で二十分近くも続けて聴けちゃうんだから――。

「これアメリカから着いたばかりですよ」。さっそくかけてくれたLPが、忘れもしない「セプテンバー・イン・ザ・レイン」の入ったジョージ・シアリング・クインテットと、ルイ・アームストロング・オール・スターズの「タウンホールコンサート」の二枚で、どちらも間もなくセンセーショナルな話題となった作品だったのだ。

（内田　修）

アメリカ軍に接収されていた昭和20年代の名古屋市公会堂